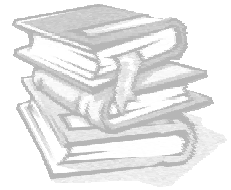




イギリス科ニューズレター No. 8 April 2004

東京大学教養学部地域文化研究学科イギリス地域文化分科
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 317)
Tel/Fax 03-5454-6304 (イギリス科研究室直通)
E-mail: british@ask.c.u-tokyo.ac.jp
Home page: <http://British-Section.c.u-tokyo.ac.jp/>



イギリス分科主任挨拶 中尾まさみ

山本史郎教授のあとを受け、今年度主任を務めさせていただくことになりました。私自身はイギリス科出身ではありませんが、学生時代から、川西進先生、山内久明先生、海老根宏先生、そして出淵博先生など多くのイギリス科OBの先生方の薫陶を受ける機会に恵まれ、イギリス科の教育の輝かしい伝統には、つねに敬意と憧憬を抱いてきました。至らないところが多いこととは思いますが、皆様のお力を借りて、何とか責任を果たすべく努めてゆく所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、2年間に亘って助手として献身的に働いて下さった渡辺愛子さんが、めでたく早稲田大学文学部(英文科)に専任講師として就職されました。頼りになるお姉さんのような存在として、学生たちから慕われた渡辺さん、今までありがとうございました。かわって4月からは堀越庸一郎さんと藤田祐さんのお二人が嘱託助手として働いて下さっています。堀越さんはロンドン大学の、藤田さんは本学地域文化研究専攻の博士課程に在学中で、博士論文執筆の準備を進めながらの勤務です。また、昨年10月からスタッフに加わってくださった外国人教師のリチャード・ピアード先生が、現4年次生から卒業論文指導を担当されることになり、早速6月末に予定されている中間発表会に向けて精力的に指導を開始して下さっています。

ご承知のとおり、東京大学は4月1日から独立法人化しました。このことがイギリス科の運命にどのような影響を与えるものか、俄には計り

かねますが、今のところ8号館3階の研究室には、いつもとかわらぬ銀杏並木の木漏れ日やわらかく差ししております。厳しい学問の場でありつつ、アットホームな雰囲気を湛えたイギリス科のよさだけは、受け継いでいきたいと心から願っています。

新任のご挨拶 R. ピアード

A few introductory paragraphs, as suggested by the British Studies department, should no doubt start with a name. My name is Richard Beard, and I arrived at Tokyo University in October 2003.

After graduating from Cambridge, I worked in Hong Kong and at the Dragon School in Oxford, as a games teacher. After a spell as private secretary to Mathilda, Duchess of Argyll, I moved to Paris where I worked at the National Library while continuing my studies with the Open University (the equivalent of Japan's University of the Air). In 1994, I enrolled on Malcolm Bradbury's Creative Writing MA at the University of East Anglia, and since then I've published four novels.

X20 (Flamingo, London 1996) is about a man giving up smoking: every time he wants a cigarette, he writes something down instead. Damascus (Flamingo, London 1998) is a love-story set on a single day, 1 November 1993, and all the nouns in the novel come from

that day's edition of The Times newspaper. The Cartoonist (Bloomsbury, London 2000) is a novel set in and around Disneyland Paris, in which libel and copyright restrictions prevent the characters from ever entering the Disneyland theme park.

Dry Bones was published by Secker and Warburg (London) in February 2004. The novel is set in Geneva, and toys with the idea that human relics contain the essence of their previous living existence.

Damascus will be published in a Japanese translation by Tokyo Sogensha in September, and around that time I hope to organise a series of English and Japanese readings from the novel. I've also written one book of non-fiction, Muddled Oafs, The Last Days of Rugger (Yellow Jersey, London 2003), and while I'm in Tokyo I shall be continuing to contribute to Japan's bid for the 2011 Rugby World Cup.

I hope that the courses I can offer in the British Studies department will be informative, diverse, and entertaining. The post-war British spy novel offered some valuable points of access into British attitudes to international politics, as well as other enduring features of British society, such as snobbery, social resentment, and heavy drinking. The same can be said for the classes I'm currently teaching in the Social History of British

Sport. I shall also be looking at the aspic Britain picked apart and then re-modelled by J. K. Rowling in her highly successful series of Harry Potter novels. I also hope to examine more closely the meaning and significance of Anglo-Australian rivalries.

I also teach a course in contemporary literature at the Hongo campus, so I'm certainly being kept busy. Fortunately, the students who attend the British studies classes are uniformly bright and interested. Britain is interesting, and it's a great advantage to be blessed with students who are already wise enough to know this.

教務補佐員 2 名からご挨拶

私がイギリスに初めて出会ったのがいつかを考えてみました。まず、こどもの頃にテレビで見た、映画『メリーポピンズ』、アニメ『小公女セーラ』・『小公子セディ』が心に浮かんできました。小学生の6年間フットボールクラブに所属していたので、フットボール(サッカー)との出会いが私とイギリスとの初めての出会いなのかもしれません。小学6年生の時にメキシコワールドカップでのリネカー(イングランドのストライカー)の活躍をテレビで見たことは、ヨーロッパフットボールのテレビ観戦という現在の趣味をもつきっかけであったと思われます。また、父親の影響もあってラグビーの試合を見るのも好きで、以前は秩父宮や国立によく通っていました。加えて、私とイギリスを決定的に結びつけることになったのは、イギリスのロックミュージックに、はまったことです。特に、The Kinks は、イギリスへの関心をかきたてました。

とはいえ、私は、イギリスのことを勉強しようと思って大学に入ったわけではありません。1993年に東京大学理科二類に入学した私が、

イギリス科に進学することになったのは、当然ながらイギリスに興味があったからです。当時のイギリス科主任、成田篤彦先生を始めとする先生方のあたたかい雰囲気を感じたからでもありました。実際に進学してみると、非常に居心地が良く、約10年にわたってイギリス科で勉強を続け、神様のいたずらか、この4月からは教務補佐員(非常勤助手)としてスタッフの末席に座ることになりました。現在、私が専門的に研究しているのは、The Kinks の代表作『Arthur or the Decline and Fall of the British Empire (1969)』の1曲目「Victoria」でも歌われている、ヴィクトリア女王の時代(特に、思想史)です。私がお世話になった助手の方々、大矢玲子さん、中和(大久保)彩子さん、浜井祐三子さん、渡辺愛子さんには、遠く及ばないとは思いますが、少しでもイギリス科のお役に立てれば幸いです。

(藤田祐)

本年度からイギリス分科で教務補佐員(嘱託助手)のひとりを勤めさせて頂いております堀越庸一郎と申します。大学院の修士課程からイギリス科でお世話になってまいりました。つまり学部の卒業生では無いのですが、修士・博士課程に在学中は、この分科の、和やかでなおかつ真摯な学問への姿勢を失わない、素晴らしい教育・研究環境を、眩しい思いで拝見させて頂いてまいりました。そのような場所で、わたくしがはたして少しでもお役に立てるのかどうか、はなはだ不安なところがございますが、今となっては、皆様にはご寛容のほどをお願い申し上げます。前任の渡辺愛子さんのお仕事ぶりに少しでも近づけるよう、藤田君と協力して、努力させて頂くほかありません。

わたくしはノルマン征服前後の教会史を中心に勉強させて頂いておりまして、現在、この教務補佐員の仕事と並行して、ロンドン大学は歴史学研究所 Institute of Historical Research の学生として学位論文を

作成中です。後に「教区教会」と呼ばれることになる、十三世紀以前の各町村落の地方教会と、司教座教会や大修道院との関係を、チャーチスコットと十分の一税というふたつの教会税に関するケース・スタディを通じて論じる、という試みなのですが、各ケースでの議論が四方八方に飛び散るばかりで全体がまとまらず、つい、夜毎、焼酎の瓶に手を出してしまいます。日常飲むお酒はいいちこをロックがよろしいようです。固めのスルメがあれば幸せです。

とにかく、できるだけ皆様のお役にたてますよう、せめてお荷物にはならぬよう、努力させて頂きたく思います。どうぞよろしく願い申し上げます。

(堀越庸一郎)

この秋には、イギリス科同窓会が予定されております。詳細は追ってお知らせ致します。

イギリス科 03 年度卒業生進路

毎日新聞社・JAL・CITIBANK・NEC・東京大学総合文化研究科大学院入学・東京大学法科大学院入学・ワシントン大学大学院入学・司法試験準備・オクスフォード大学法学部入学

イギリス科運営委員

本年度のイギリス科運営委員は、中尾まさみ、アルヴィ宮本なほ子、安西信一、エリス俊子、河合祥一郎、木畑洋一、草光俊雄(今学期在外研究中)、小林宣子、斉藤兆史、田尻芳樹、丹治愛、山本史郎、Richard Beard、Paul Rossier、Brendan Wilson です。

イギリス科からのおねがい

ご住所等、ご連絡先に変更がございましたら、お手数ですがご一報いただければ幸いです。